
勇者と奴隷の珍道中

神崎悠人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と奴隷の珍道中

【Nコード】

N3731Y

【作者名】

神崎悠人

【あらすじ】

「あゝやりすぎた」

グランロデオ王国。どこぞの異世界にある国の一つだったが、僅か一週間で崩壊してしまった。生き残ったのは地球から勇者として拉致された日本人の美倉唯と、呼び出した張本人である巫女のみくさ「エシユリー」。どうしたものかとみくさの首に巻かれている首輪の手綱を引き、唯は異世界を旅することになった。

「できれば言葉攻めも下さい」

「他所当たれ」

プロローグ

「あゝやりすぎた」

グランロデオ王国。何処にあるかは分からない異世界にある王国だが、そこに人々の姿は無い。転がっているのは人間や動物の死体の山だ。そんな死体の山を地球から来た美倉唯は、王国の中心に聳え立つグランロデオ城から見下ろしていた。

「た……たす………」

「やかましい」

ゲシ、と国王を蹴り飛ばして唯はバルコニーに背を向けた。城の中に入ると、赤い斑点やら眼球から出血している王族が見えた。生存者はほとんどおらず、先程彼が蹴り飛ばした国王も丁度今息を引き取った。死体に染まる玉座周辺にて生きているのはもう、目の前で座り込んでいる王宮仕えの巫女、ミクサ「エシユリー」だけである。「とりあえず今日からお前は俺の奴隷な。逆らったら蹴り殺す」

「はい、ご主人様。御褒美に鞭を下さい」

「鞭無いから却下」

性格が反転してMになっている元巫女現奴隷に唯は思わず身を引いてしまうが、身から出た錆と考え、流すことにした。

「さてこれからどうするかな」

とりあえず唯は玉座に腰掛け、足を組んで目を閉じた。

そもその始まりは、目的を果たしたことによる高揚感と、それに伴い生まれた油断からだった。完成品の納められた鞆を抱えて職場を後にしたのはいい。けれども気がつけば見知らぬ異世界に拉致され、目の前にいた巫女（当時はまだ清楚な感じがした）のミクサに、

「ようこそ勇者様。グランロデオ王国へ」

等と言われて混乱している内に玉座の間に拉致され、王様に勇者

の称号を無理矢理与えられた。そこまではいい。

けれども唯に待っていたのは、勇者とは名ばかりの奴隷の如き扱いだっただ。重力負荷が違うために強化（正確にはこの世界の住人の方が弱い）された肉体で魔物と戦い、魔力があるからと禁呪やら実験中やらの魔法の実験体。拳句の果てにはその様子を見ていたミクサですら、何かのスイッチが入ったのかSとなって言葉攻めや鞭打ちを与えてくる始末。

そんな状況になってブチ切れない人間は居ない。けれども人数や経験の差で逆らうこともできない。……彼以外の人間ならば。

そしてブチ切れた唯は鞆の中に入っていたものに手を出し、ばら撒いたのが三日前。その結果は王国の崩壊に繋がり、唯と（偶々寝ているのを見つけた）ミクサを除く全ての生命の灯を消し去るのに至った。

そもそも相手が悪かったのだ。王国に居た人間は彼の何を何も知らない。地球では残虐ドSで周囲に恐れられていることも、細菌研究の第一人者で勝手に映画に出てくるようなバイオテロクラスの細菌兵器を趣味で製作する程の天才だということも知らずに呼び出したのだ。

ワクチン（抗ウイルス薬）もあるにはあったが二人分しかなく、自分と奴隷が欲しくて偶々近くで寝ていたミクサに注射したのでもない。作ろうにも材料も道具もない。もしかしたら魔法とやらで何人が助かるかも、とか考えていたのだがあまりにも墮落しすぎていたのか、対抗手段を講じる間もなくたばっていった。

そして生存者がゼロとなり、現状に至った。

「ご主人様、辛うじて息のあった女中が今死にました。もう私達以外には生存者はいません」

「その口を閉じる。蹴り飛ばされたいか？」

「むしろタコ殴りにして下さい」

きらきらした目で被虐趣味に走った奴隷を無視して、唯は嘆息し

た。そもそも絶望を、生き地獄を味あわせるためにわざと生かしたというのに、当の本人はSからMに変貌してしまった。これでは生かした意味がなくなる。

「まあ、道案内はいるか」

勝手が分らない異世界では立場はどうあれ協力者が居ると居ないでは違う。それどころかこちらの自由になる奴隷を手に入れたのだ。それで十分だと思いたいが……。

「どうぞ」

「勝手に嵌めてろ」

「畏まりましたご主人様」

本人が乗り気ってどんな御都合主義だと頭が痛くなる。唯は勝手に傍にいたミクサが何時作ったのか自作の首輪をいそいそと嵌め、そこから垂れ下がっている手綱を差し出してきたことに思わず頭を抱え込んでしまった。

けれどもこれでは先へ進まない。

「なあ、俺を元いた世界に返すことは可能か？」

「無理です。そもそも未完成な魔法なので、片道しか考えていませんでした。申し訳ありません。どうか愚かな奴隷に罰をお与えください」

役立たずな奴隷である。まあ、今帰ったとしても退屈な日常の繰返しか。未だ二十代だが、セカンドライフと洒落込むのも悪くない選択かもしれない。そう考えた唯は手綱を受け取り、王宮の外へ出ることにした。

「これから旅に出るか。お前はせいぜい扱き使ってやるよ」

「できれば言葉攻めも下さい」

「他所当たれ」

選択を誤ったか、と若き細菌学者は幸先の不安さに肩を落としたのであった。

登場人物

美倉唯

職業 旅人（細菌学者↓拉致被害者↓勇者↓大量殺戮者と経て実質無職）

人種 黄色人種

性格 残虐ドS

装備 勇者の剣、短剣、医療用メス（×10）、各種医薬品、魔法のローブ

備考 某映画の新種ウイルスを趣味で製作してしまう程の天才

ミクサ「エシユリ」

職業 奴隷（元王宮仕えの巫女）

人種 白人（蒼銀色の髪と同色の瞳）

性格 覚醒ドM

装備 奴隷の首輪（自作）、巫女装束（日本のものと大差ない）、

巨大鉄扇（鋼鉄製のハリセン）

備考 当初は敬謙な巫女だったが、勇者の処遇を聞いてSに、崩壊する国を見てMに覚醒した

第01話

「それでご主人様。これからどちらへ？」

「とにかく人里だ。風上で一番近い国へ案内しろ」

「畏まりましたご主人様」

首輪をぶら下げたまま頭を下げてきたミクサを一瞥して、唯は風上の方へと歩き出した。

ばら撒いた細菌兵器は空気感染を引き起こす代物だから、風下に位置する他国にも影響が出ているかもしれない。幸か不幸か、この世界では風は一定の方角にしか吹かないため、風上ならば安全だろうと踏んでの判断だ。この世界が地球の様に球体の惑星ならば近い将来、ウィルスで全滅してしまう恐れもあるが、その時はその時だ。二人が道なりに歩いていると、ふと唯は隣のミクサが何処まで忠実なのかを知りたくなってしまった。

「命令だ。全裸に「はい！」……… ならなくていいから服を脱ぐな」
忠実すぎた。命令を言いきる前に服に手を伸ばすなんてどうかしている。そう思ったが、もしかして絶望を味あわせ過ぎたから頭のねじが飛んだのではと唯は気づいた。

「…… お前、ちょっと逆立ち「はい！」して、みる……」

間違いない。できもしない逆立ちに悪戦苦闘しているミクサを見下ろして、唯はそう結論付けた。ただ狂っているだけだ、この女。（そんな奴を奴隷にしようとは…… 俺も堕ちたな）

とりあえず尻を蹴飛ばしてやめさせると、唯は再び歩を進めた。ミクサも手綱を引かれながらも、その背中を追いかけてくる。狂ってDMになった女をどうにかするのは後回しにして、とにかく先を急ぐことにした。

途中、盗賊に襲われるだの、魔物に狙われるだのといった事態もなく、無事小さな町（住民が生きていた。これ重要）に着いた二人

はまず、質屋で宝石類（王宮からの強奪品）を幾つか売りさばいて資金にし、可もなく不可もなく普通の宿屋に部屋を取った。

「さて……」

一人部屋のベッドに腰掛けた唯は、鞆を開けると中身を改め出した。中から出てきたのは職場から勝手に持ち出したり王宮からくすねたりした医薬品の数々、研究中の薬剤の処方箋、某医者に憧れて持ち歩いているメス10本、護身用の短剣（地球にて購入。ステンレス製）である。他には腰に差した勇者の剣（王宮からの支給品。ただの鉄剣）とベルトに結び付けたポーチに入っている応急キット（地球製）の二つだ。後は先程取り出した宝石類と換金した金銭のみ。

「おい、お前の持ち物も「はい！」服は脱がんでいい!!」

鞘に納めたままの短剣を残念な頭に叩きつけた唯は、立ちあがってミクサの手荷物を奪い取ると、口を広げて床にばら撒いた。

下着を含む衣類はいい。武器らしき鉄扇（形は明らかにハリセン）も許容範囲内だ。小物類は自己責任でいいからどうでもよし。家族の肖像画なんぞには興味ない。けれどもこれだけは許せない。

「おい、奴隷」

「何ですかご主人様？」

起き上がったミクサに唯は、手に持っていた小瓶を突き出して問いかけた。

「……これは何だ？」

「媚薬です」

毒かと思った俺は思わず倒れそうになるが、辛うじて踏ん張った。

「何故こんなものがある？ 本当は毒じゃないのか？」

「違います。そもそもそれは私物です。普段から毒を持ち歩くような人間はいません」

「目の前にいるだろうが」

「申し訳ございません。どうか卑しい私めに罰を」

…… 本当に媚薬か、と唯は疑心暗鬼になっていた。そもそもこの

世界の薬品には明るくないため、もし違っていたらそれだけで大変なことになる。細菌や薬品に明るい故の慎重さが仇になっている唯であつた。

「何で媚薬なんぞを持ち歩いていやがる？」

「ご主人様との熱い夜には必需品です」

「……そうかい」

こいつ、もしかしくなくても恋仲の男はいないだろうと唯は考えた。大方、箆笥辺りの肥やしになっているから持ち出したんだろうが、男っ気がないから俺に走る等という馬鹿げた発想に……走りかねないな。元から狂ってるし。

「よし罰だ。この瓶全部飲んで始末しろ」

悪い子の皆は媚薬と出た時点で良からぬ妄想に走つたことだろう。けれどもこれは（性的な意味で）健全な小説なので、イヤんな展開は一切ないことを明記しておく。あの後二人がどうなったかという……。

「ごしゅ、じんさ、まあ」

「……耳栓が欲しい」

大量の媚薬を服用した為に興奮してもだえ苦しんでいる奴隷（拘束済み）と、ミクサを無視してベッドに転がっている唯という、何とも色気のない展開だった。そして夜は更けていく。

本日の調教

理不尽な命令2回（内1回は中断）

蹴り飛ばし1回

物品投擲1回（鞘入りの短剣）

拘束して朝まで放置（媚薬を多分に投与した上で）

第01話（後書き）

思いつきと息抜きに書いたものです。希望者が多ければ続きを書きます。二次創作小説のほうもよろしく御願います。では

第02話

「……ん」

差し込まれた陽に当たり、唯の意識は徐々に覚醒していく。地球の安アパートでも、王宮の牢獄染みた部屋でもない、宿屋の一室だと思いだすと身体をゆっくりと起こし……。

「おい……」

「おはようございます、ご主人様」

どうやって抜け出したのか、目の前には奴隷のミクサがベッドの上で正座していた。流石に媚薬の効果は薄れたらしく、昨夜のように身悶えしていないが。

「朝餉になさいますか？ 湯浴みになさいますか？ それともわた

——」

「ベッドから降りろ」

朝から不快なものを見た。奴隷を容赦なく蹴り飛ばした唯のテンションはベッドから転がり落ちたミクサのように下落していった。

「……さて」

宿屋の一階にある食堂で食事を終えると、部屋を出る前に唯は昨夜の続きに取り掛かった。持ち物の確認である。

昨夜はミクサの媚薬で一悶着あったため、着衣にまで気が回っていなかったのだ。旅に出る前に装備も含めて確認しておかなければならない。

現在、唯が身に纏っているのは地球に居た時から着ていた濃紺色のジーンズに厚手のカジュアルジャケット（黒）、インナーにこの世界で支給されたシャツだけである。他にも一応、王宮からかつぱらってきた魔法のローブがあるのだが、機能性とはかく装飾が派手なので下手に着込むと目立つ。

仕方がないのでローブは鞆に仕舞い、代わりに腰のベルトに短剣

の鞘を、ジャケットの懷にメスを数本身に着けた。後は名前だけの勇者の剣だが、ただの鉄剣だから売って別のものを購入することにした。こちらにも無駄に装飾過多なので、売れることは売れるだろう。勇者というネームバリューにも興味はないし。

「後は……」

そう呟いて唯は視線を部屋の隅で転がっているミクサ（先程再び蹴り飛ばした。また馬鹿をやりそうだったので）に向けた。彼女は地球の日本でも見るような巫女装束を身に着けており、長い髪先端だけを紐で縛っている。髪はともかく、装束そのものは魔法がかかっているらしく、多少の防御力が見込まれるらしいが、それだけというのも味気ない。

「前衛にも罠にも使えそうにないな」

武器は昨日見た鉄扇ハリセンもじきを常備させておけばいいが、防具となると話が違ふ。今の服装も少しばかり目立つ代物だし、今後のことも考えて……。

「起きろ奴隷、出発前に買い出しに行くぞ」

「畏まりましたご主人様。それでどちらまで？」

呼びかけると同時に起き上がるとは、さては呼ばれるまで横になつて休んでやがったな。……いや待てよ。

「おい奴隷、お前魔法は何が使える？」

「ご主人様を呼び出した召喚魔法。回復、治癒魔法を一通り。後は簡単な強化魔法です」

「回復関連はどれくらいの怪我や病気の治療が可能だ？」

「病気は風邪等の治りを早める程度、怪我は自己治癒能力の促進が限界です。……ああ、後簡易的にですが体力回復の魔法も使えます」
成程と、唯は確信した。

「お前、俺に呼ばれるまで回復魔法を使っていただろ？」

「正確には治癒まほ——っ!？」

思わず口を閉じたミクサに、唯は嗜虐的な笑みを浮かべた。なんてことはない。この馬鹿は何度蹴られても自分で治療していたのだ。

どつりで壁や床にぶつけてできるはずの痣がなかったわけだ。おそらく媚薬に關しても使っていたに違いない。じゃなきゃ一瓶丸々の媚薬が一晩で効き目を無くすわけがない。

「成程成程、お前は主人である俺に“黙って”、“勝手に”、魔法をバンバン使っていたわけか」

「あ、ああ……」

流石のミクサも、状況を理解して思わず戦慄している。そりやそ
うだ、魔法を使えることを黙っていただけでなく、勝手に使っていたのだ。これでは自分は罰を受けてしまう。しかも、自分の望まないであろう罰を。

「ご、ご主人様、ど、どうかお慈悲を……せ、せめて一思いに殴りつけて下さい」

「安心しろ、今は殴ったりはしない。……ただ」

言葉を切ると唯は手を伸ばし、ミクサ自作の首輪に指を触れて呟いた。

「『Seal——封印』」

「あうっ!？」

身悶えするミクサから手を離し、唯は軽く手を振った。

「お前の魔力は封印した。以降は俺が許可しない限り魔法は使えない。……禁呪も役に立つもんだな」

「……あの、ご主人様？」

軽い。これでは罰にはならないとミクサは思ったが、同時にまだ終わっていないことに気づかされていた。

「さあてお望み通りに……殴りつけてやるよ、このゴミが!」

「できれば言葉攻めももっと苛烈に——アベシッ!？」

ミクサへの折檻は結局陽が高くなるまで続けられ、昼食も宿屋でとることになった二人であった。後折檻は暴力オンリーだから、悪い子は変な期待と妄想をしないようにね。

今朝の調教

蹴り飛ばし2回

魔力封印（以降は主人の許可なく魔法は使えません）

折檻（徹底的なフルボッコ）

第02話（後書き）

思ったよりネタが浮かんでしまう。卒業研究の勉強をしなければいけないのに……何故だ！？

第03話（前書き）

こつなりや やけくそだ！
勉強しつつ書いたらあゝ！！

第03話

「ハア、ハア……」

ぼこぼこに殴られ、意識が朦朧としているのか僅かに身じろぎするだけでピクリともしないミクサの腹に腰かけ、唯は今後の予定を修正していた。軽く息切れしているが、この程度ならば問題はない。「買い出し後に出立は……無理そうだな」

既に正午となり、陽は高く昇っている。急いで町を出たとしても、野宿の支度等を考えると大して距離は見込めない。仕方がないので買い出しを今日、じっくりと済ませて明日の夜明けに立とう。そう纏めると唯は立ち上がって、ミクサの腹に蹴りを入れて奴隷の覚醒を促した。

「起きろ奴隷」

「あ……は、い。かしこま、り。まし、た。ごしゅ、じん、さ、まあ」

ミクサの顔はもはや別人で通る程に腫れ上がっていた。元々が整った顔立ちをしていただけに、この変貌ぶりにはやりすぎた感が否めない唯である。……まあ、大量虐殺を行っても平然としている彼に、罪悪感が浮かぶなどということは有り得ないのだが。

「『Permission——許可』とつとと治せ。行くぞ」

「は、はい……『Healing——治癒』」

怪我の治療を済ませ、顔を元通りにしたミクサを従えて、唯は部屋を後にした。

移動中の描写を書いても退屈なので、目的地に着くまでの間、この小説を読んでいる悪い子にこの世界の魔法について説明しよう。この世界では誰もが魔法を使おうと思えば使えるんだ。けれども資質や才能等、個体差によって使える魔法が限られてくるんだ。しかも魔力容量、いわゆる魔法のエネルギーを蓄えられる量も人によっ

て違う上に、偶に魔力を持たない人間が居るから、外部にエネルギーを貯蔵できるタンクを外付けする必要があるんだ。所謂外付けHDDだね。それでも駄目な人間は、一般的な魔法どころか基礎中の基礎である『Light——光』という、明かりを生み出す魔法ですら習得するのに十年や二十年もかかるから、はつきり言って無駄な努力だよな。

後勇者として拉致された唯君は、落ちこぼれな連中と同格にするべきでないどころか、世界最高峰の素質を持っていると言っても差し支えないんだ。だから滅ぼした王国連中に禁呪だの実験中の魔法だの実験台にされたんだね。ご愁傷様」

「……何故か腹立たしく感じる」

「どうかなさいましたかごしゅ——げひっ!？」

武器屋の前に来た二人であつたが、突如苛立ち始めた唯は後ろに控えていたミクサを（八つ当たり気味に）後ろ蹴りで蹴り飛ばしてから店に入った。蹴り飛ばされたミクサも先に入った唯に続いて店の暖簾をくぐった。すぐさま立ち上がったところを見ると、大した怪我はしていないらしい。

「剣を売って別の武器が欲しい。これと同格以下の武器を見せてくれ」

「どれどれ……」

おそらく工房になっているであろう奥のスペースから恰幅のいい中年オヤジが出てきたので、唯は手に持った（自称）勇者の剣を差し出した。

「こいつは……ただの鉄剣だな。無駄に装飾の凝った」

「売れるか？」

「装飾だけならな。剣の方は役に立たないだろうが」

中年オヤジの言に従い、適当な棚に視線を巡らせて武器の物色を始めた唯。途中、嬉々として鞭を持ってきたミクサを蹴飛ばしたが、結局大したものは見つけれなかった。……近くの壁に飾られたそ

れを見るまでは。

「オヤジ、こいつは売り物か？」

「ん？……あんた、それを知ってるのか」

「故郷に似たようなのがあからな」

とはいえ、現在では腰に差しているものは滅多にいないが。

壁に飾られていたのは一本の刀だった。黒い鞘に納められた、刀身が1メートルくらいの歴史を感じさせる代物である。

「この刀の茎を見てもいいか？」

「いいぜ。あんたは扱いを心得てそうだからな」

「知識だけさ。粗相しそうになつたら止めてくれ」

刀を壁から外して手に持つと、唯は適当な布を口に咥えて柄に触れた。多少手間取りはしたものの、無事柄を外すことに成功し、茎を晒すことができた。

「さて銘は……オヤジ、これを何処で手に入れた？」

「うちの爺さんが昔、変な格好をした男から買い取つたらしい。それ以外は知らんな」

「どうかなさいましたか、ご主人様」

ミクサの問いかけを無視して、いや耳に入らずに唯は黙って刀の柄を戻した。

茎には『永仁五年三月一日』と刻まれていた。昔刀について（興味本位で）調べていた時に知ったものと一致していた。刀の銘は蛸丸。太平洋戦争の折に行方不明になった国宝である。おそらく自分と同じ日本人が、何らかの手段でこの世界に来ていたのだ。その彼がどうなったかには興味はないが、こちらに來た手段には興味がある。

「これ以外の刀はあるか？」

「うちの工房で作ったものしかないぞ。作り方も買っていたからな」

「……ならいい」

こっちに永住することに決めたとはいえ、帰る手段があるなら知っておくにこしたことはない。そうすれば、地球の技術力も追加し

てこの世界を乗っ取ることも可能となってくる。また、逆に地球を牛耳ることも。

（世界征服に興味はないつもりだったが……可能なら面白そうだ）
「オヤジ、この刀をくれ」

こうして唯は刀『螢丸』を、ミクサはぼろぼろの鞭（殺傷性ゼロ、痛めつける以外の用途無し）をおまけで手に入れ、二人はホクホク顔で店を後にしたのであった。

今回の調教（以降『今回の調教』でタイトル固定）

蹴り飛ばし2回

魔法許可1回

鞭打ち（予定として追加）

第04話

さてさて現在彼らは防具屋へと向かっている真つ最中。その店は衣服屋も兼ねているから、装備関連の用事の残りは全部そこで片付くね。では移動中に恒例（予定）のこの世界の勉強講座だよ。

今日は魔法の使い方だよ。悪い子の皆、早くおいでー！

さて、皆はあの二人が魔法を使っているのを目の当たりにしたよね？

『Seal——封印』、『Permission——許可』、そして『Healing——治癒』の三つだよ。

頭でつかちで人に常識押し付けてくるような良い子達ならともかく、悪い子の皆はもう気づいたよね？ そう、詠唱自体はシンプルなんだ。まず英語、次に日本語と同じ意味の単語を並べて、その意味を魔法として使うんだ。でもただ唱えればいいってものじゃないよ。ちゃんと意味の通りになると強くイメージすることが大切なんだ。ある人も言っていたよね、『イメージするのは常に最強の自分』って。だから素質のある人はイメージが強固で、ない人は懦弱なんだ。イメージの差が資質の一つに関わってくるんだ。簡単だよ？ ではまた次回。次の勉強講座をお楽しみに♪

「……うゝむ」

「どうかなさいましたか、ご主人様」

「いや……」

防具屋に差し掛かる前、唯は何やら無性に苛立たしくなっていた。「何故移動する度に苛立たしくなるんだ……」

「どうぞ」

「アホ」

バシン！ と鞭を差し出してきたミクサの頭を強めに叩き付けると、唯は頭を振るって思考のリセットにかかった。鞭を落としてし

まい、慌てて拾おうとする奴隷を尻目に、唯はさつさと店に入ってしまった。

中は防具類よりも衣類の方が多く、後者がメインだとアピールしていた。けれども奥の方に並べられた防具類も革製でありながら遊びはなく、立派に盾や鎧の役割を果たしそうであった（革製だが）。「いらつしやい、なんにする？」

「まずは服がみたい。旅装関係はその棚か？」

首肯する店主（中年女性。見た目的には大らか）に一礼し、唯は追いついてきたミクサを連れて旅装関係の棚を物色し始めた。生地は荒いが（この世界に加工技術を求める方がどうかしている）しっかりした作りの服を上下3着ずつ選ぶと、今度は女性向けのエリアに目を向けた唯。

「巫女服は目立つから、地味な服を選んで来い」

ミクサにそう命じると、返事を聞く前に店主に選んだ服を押し付け、唯は革製の防具類を物色し始めた。作りは革製でも、作り手の腕がいいのか質のいい商品が棚の上に並んである。中には薄い鉄板を仕込んであるものもあり、下手な金属鎧よりも信頼できそうである。

「ご主人様。こちらはもうどうでしょうか？」

「もうえら——馬鹿かお前は——」

唯の踵落としがミクサの頭を打ち付けた。しかし思わず踵落としを決めた彼に非はほとんどないだろう。何故なら彼女が選んできたのは踊り子の服。上半身は際どい胸当てのみで下半身は腰に巻きつけてあるハーフマントと前掛けのみといった、ものすごく目立つ代物だったからだ。しかも何を勘違いしたのか、彼女はそれらを選ぶだけでなく、実際に身に着けているのだ。

例え試着OKでも、これは頂けないね。

「俺の命令聞いてたか、おいこら」

「き、聞いていました……」

頭を踏みつけられ、床の上で伸びているミクサの手が伸び、指さ

したのは女性用の旅装が何着か、棚から避けられてある。仕立ては若干古びてはいるが、未だに現役として通用する品々だった。おそらく中古品だろう。

「じゃあその服は何だ？」

「ご主人様との熱い夜に――」

「二度ネタ禁止――！」

もう一度顔を床に叩き付けてから、唯は足をどけて店主へと近寄っていった。

「というわけであの服も買う。この馬鹿が着ている服は返すからな」
「毎度あり……彼女はいいのかい？」

そう言ってミクサを指差してくる店主に唯は力強く頷いた。

「あいつは俺の奴隷な上に被虐趣味です」

「……相性抜群みたいだね」

呆れと何かよく分からない感情を混ぜた笑みを浮かべて、店主は衣類の入った包みを唯に差し出してきた。唯もそれを受け取ると、ミクサの傍に戻って彼女の腹を蹴飛ばした。

「『Permission――許可』さっさと治してその服脱いで来い」

「『Healing――治癒』畏まりました、ご主人様」

なんだかんだ言いつつも素質があるのか、素早く怪我を治すとミクサは服を返すために脱ぎ始め――

「向こうで脱げっ！？」

唯に蹴り飛ばされたのであった。

今回の調教

はたく1回（頭を強めに）

踵落とし1回

踏みつける1回

叩き付ける1回（顔を地面に）

魔法許可1回

蹴り飛ばす2回

第05話

さて買い出しを終えた唯は、購入した衣類（2人分×3着）をミクサに持たせて雑貨屋へと向かっていた。ちなみに防具に関しては結局選ばなかった。店主曰く旅装に簡単な魔法をかけているから、大抵の攻撃は防げるらしい。後は周辺の地図と非常食、水を入れる水筒で当面必要な物がそろうことになる。

「あのお、ご主人様」

「なんだ？」

道中、荷物を抱えたミクサは唯に声をかけた。

「強化の魔法を使う許可を下さい。これだと荷物の重さでご主人様についていけません」

「強化？」

そういえば強化の魔法が使えると言っていたな、と唯は今朝の騒動を脇に寄せて魔法関連の記憶を手繰り寄せた。

「強化って、どれくらいのものが使えるんだ？」

「簡単にですが、肉体を多少動きやすくすることができます。後は効率が悪いですが、一時的に武器による攻撃を強化することもできます」

「ふ〜ん」

まあ、その程度ならいざ逆らつてきても問題はないか、と唯は特に悩むこともなく許可を出した。

「『Permission——許可』」

「——フフフ……」

突如含み笑いを始めたミクサを訝しんで振り向くと、突如視界が覆われた。

「なっ!？」

一瞬硬直するも、勇者としていびられていた時の経験（意外と使える）が役に立って咄嗟に手が動いた。受け止めたのは先程ミクサ

に押し付けた衣類の入った袋。

「おい、これはどういう——」

「『Reinforcement——強化』ハアア……!!」

姿形は変わらない。けれどもミクサの周囲に纏っていた雰囲気徐徐に重苦しく感じてきた。おそらく肉体を強化した影響で纏っている空気も重く感じてしまうからだろう。

「……これでもう、奴隷扱いはできないわよね。可愛いそうな唯君？」

「おい、まさか……」

一時期、ミクサから『唯君』と呼ばれていたことはあったが、当時は彼女が周りに感化されてSだった時だけだ。けれども、例えばMだったとしても、以前のSだった彼女もまた、ミクサ「エシユリ」であることに変わりはない。

まさか油断したところを歯牙にかけるつもりだったとは、と唯は腰に差した刀の柄に手を伸ばし、

「さあ……今すぐ引き返して踊り子の服を購入してきなさい！」

「んなしょうもない理由で反逆してんじゃねえ!!」

腰から鞘ごと引き抜いてミクサを頭から一刀両断するかのように叩き付けた。

余談だが例え彼女が自らの肉体を強化しても、現在の彼の身体能力には遠く及びもしないだろう。幼稚園児から小学生に強化されても成人男性に適うわけではないのだ。

そして唯は刀を腰に戻すと、巫女装束が捲れ上がるのも厭わずに気絶したミクサの足を持って引き摺っていった。

さあ悪い子の皆、彼らの移動中恒例の楽しい勉強の時間だよ。良い子の世間的評判を下げてないで早くおいで。

さて今日は禁呪として使われている『Seal——封印』について説明するよ。

封印は用途は様々だけど、一貫しての効力は『何かを封じる』こ

となんだ。封じる対象はそれこそ何でもいいんだ。だからこそ禁呪として扱われていたんだね。けれどもこの魔法は『何かを封じる』分、封じる対象が曖昧なんだ。だからイメージしづらくて精々『鍵をかける』位にしか使われていない筈だったんだよ。でも王宮の誰かが他のものも封じられると思いつき、どこまで封じることができるのかを唯君で試したんだ。そして魔法やら身体能力やらを封印して自在に操ろうとしたんだけど、この魔法、結構使い勝手も悪いんだ。

だって封印を解く条件が『術者の許可』だけじゃなく、『術者の死亡』、『イメージの崩壊』、『魔力枯渇』と結構ハードな魔法なんだよね。その難易度から、封印の魔法は禁呪扱いを受けることになったんだ。でも唯君は『世界最高峰の素質』、『素質に伴う魔力容量』、『強固なイメージ』と解除条件にあまり当てはまらないから、ミクサちゃんに簡単に封印魔法をかけられたんだね。まあ、例え禁呪がなくても、本気になった唯君にミクサちゃんが勝てるわけがないんだけどね。」

「……んん」

ミクサが目を覚まして真っ先に映ったのは主人である唯の足元だった。叩き付けられた頭を擦りつつ立ち上がると、丁度いい物を終えた唯が荷物を持って振り返ってきた。

「起きたか、奴隷」

「えつと、ご主人様……」

ミクサは先程の騒動が原因で目を合わせられない。個人的には媚薬同様、必要だと感じて購入を迫ったのだが、すげなく断られてしまったのだ。個人的には純粋な暴力も好きだが、性的な暴力（絶対に阻止するから安心してね）も受けたいのだ。けれども媚薬は強制処分、際どい服装も却下されたのだ。例え奴隷に身をやつしても、娯楽を欲しがるのは人間の性だ。だから逆らっても手に入れようと、DSモードに返り咲いたのだ。

けれども敵に回したのが自分の主人、

「後でたっぷりお仕置きしてやるからな。覚悟しておけ」

「は、はい……」

グランロデオ王国を単身で滅ぼした悪逆非道な元勇者、美倉唯であつたことが彼女の敗因であつた。はてさて彼女の運命やいかに！

今回の調教

鞘叩き1回（脳天にすごい勢いで）

引き回しの刑（気絶状態のため、罰になっていない）

第06話

彼女は怯えていた。そう、前回ドSモードに返り咲いて意中の品（踊り子の服）を手に入れようとした奴隷のミクサである。彼女は震えた身体に鞭打ち、肉体労働に勤しんでいた。

ちよつと魔が差したただけなのに、それでもえげつない報復が待っていると思わせる足取りでミクサの前方を歩くのは彼女のご主人様、美倉唯である。彼は小さな包みを持っているだけだが、その中身がミクサにとっては恐怖の対象なのだ。

（あの中身は……何？）

旅のために購入した携帯用の医薬品ならまだいい。けれどもあれが毒とかならば、いや話を聞く限りでは薬品関係に精通している彼のことだ。新しい薬を調合し、罰と称して実験台にするかもしれない。あまりの恐ろしさに足取りも重くなるミクサだが、それでも足を動かさなければならぬ。少しでも罰を重くしないようにしなければ、明日の夜明けすら見れなくなるのかもしれないのだから。

宿屋につき、明朝出立する準備を整えた二人は、前後に並んで一階へと降りていった。食堂につくと、首輪につられて集まってくる視線を無視して、奥の席へと腰かける。ただしミクサは奴隷らしく、床の上に腰かけたのだが。

「あ、ご主人様。お食事を——」

「命令だ。そこでじつとしている」

そう言い残して、唯は食事を取りに行った。昼食まではミクサに取りに行かせていたのに、夕食だけは違うことに、ミクサは絶望した。

（もしかしたら、最後の食事かもしれない）

殺す前に優しくされたのかと感じたミクサは、唯が戻ってくるまで心中で泣いていた。食事中も一切顔を上げることもなかった彼女の食事は、いつもよりしょっぱかったらしい。

今日は食事中にお勉強タイムだ。悪い子の皆は食事しながら聞いてね。

さてこの世界の食事だけど、実際は地球のものと大して変わらな
いんだ。けれども内容は、中世ヨーロッパのものに近く、洋食がメ
インなんだ。でもでもお米とかを食べる風習もあるから、一概に洋
食とは言えないんだ。例えるならば和洋中ごちゃ混ぜな現代日本の
食卓かな。結構何でもあるから、唯君もこの世界でセカンドライフ
を送ろうとしたんだね。皆の好きな食べ物はこの世界にあるかな？
それじゃあ今日はこの辺で。はい、御馳走様でした。

(まずい、まずいまずい……………)

ミクサの残りの命は、既に秒読みに入っていた。

このまま部屋に戻れば、どのような仕打ちを受けても自分は甘ん
じて受けなければならない。否、魔力を封印され、武器もない、力
もない自分にできることなど、たかが知れている。どうすればいい、
どうすれば生き残れる？ 例え奴隷でも、今が至福の自分にとって
死の恐怖は決して受け入れられない代物なのだ。

「…………さて、奴隷」

「はい。何でしょうか、ご主人様」

分かっている、ここで死ぬのだ。けれどもこのまま罰を享受する
位ならば、と服に手をかけたミクサ。元々身体を許すつもりだった
のだ。だったら色仕掛けでも何でもして奴隷として生き残る（性奴
隷も可）！！

「そろそろ腹の調子が悪いんじゃないのか？」

「はい？」

強く決意したミクサの手が思わず止まってしまった。

変なことを聞かれて思わずポカンとしているミクサを眺めている
唯の顔はえらく嗜虐的に歪んでいる。けれども腹の調子を聞かれた
と、いうことは…………。

「はうつ！？」

答えは下剤だった。

「ご、ご主人様……！！」

「それだよそれ。その顔が見たかったんだよね」

現在ミクサは厠に行かされることなく（当然のことながら）、身体を縛り付けられて部屋窓から吊るされていた。腹部からくる荒波とぶら下がっていることで起きる引力、宿屋の裏手とはいえ人通りのある場所での羞恥と三重苦に苦しむミクサの表情は、この世の絶望を味わい尽くしたかのように暗く刻まれていた。

「ま、魔法を使わせて——」

「そうしたら反逆されたしなあ」

現在、唯の顔はとても生き生きとしている。反逆を未然に阻止して、奴隷を引きずって雑貨屋に入った時に見つけた品でピンと来たのが夕食前。ミクサの分の食事にくっすり下剤を混ぜて食べさせたのだ。どれくらい効くのかと説明書の適量通り（補足：この国の言語は魔法で翻訳できる）混ぜたのだが、かなりの効き目らしい。最初は味の変化で気付くかとも思ったが、何を考えていたのかぼーっとしていたので気づくことなく部屋へと戻り、今に至るというわけだ。

「せ、せめて厠に……うつ」

「明日起きたら降ろしてやる。んじゃお休み」

ご主人様……！！ という奴隷の叫びがこだましたが、唯は構うことなくベッドに潜って眠りについた。奴隷を引き連れる本来の目的を果たし、その顔はひどくご満悦といったかんじである。

今日の調教

下剤（適量）

野ざらし（縛り付けて部屋から、朝まで）

第07話

——ぎい……

「ちつ、間に合いやがったか」

「いえ、結構ギリギリでした……」

明朝。やつれた顔をして部屋に戻ってきたミクサは、体力が尽きたらしくそのまま床に倒れ込んだ。その様子を唯はベッドに足を組んで腰掛けた姿勢のまま、静かに見下ろしている。

「というかよく間に合ったな。こっそり魔法で便意を誤魔化したか？」

「例え使えても、そんな魔法に頼ったら私の矜持が——」

「奴隷に人権は無いぞ？」

ますます床に突っ伏してしまふ奴隷に、唯は近くに置いておいた鞭を手にとると軽く振ってミクサを叩いた。

「あうっ！……もつと下さい」

「気力があるのやらないのやら……んで、どうやって間に合わせた？」

「答えますからもつと鞭を……」

答えたらな、と唯は軽く呟いた筈なのに、ミクサはすぐさま起き上がってベッドの近くに正座しだした。そして滔々と語り始める奴隷に主人は呆れたとか何とか。

「エシユリー家には108つの秘儀があり、その内の一つを使いました」

「色々聞いてみたい気もするが……一体どんなものだ？」

「肛門括約筋の操作です」

……こいつもう女であること忘れてね？

堂々と際どいことを答えるミクサに唯がそう思っても仕方がないのかもしれない。呆れた唯はとりあえず鞭をやるかと数度手首を振るった。適当な鞭でも、向こうにとっては至福らしくその顔は途轍

もなく緩んでいたとここで追記しておこう。

さてさて悪い子の皆は疑問に思ったことだろう。何故ミクサちゃん
は唯君からの仕打ちに喜んだり嫌がったりしたのだろうか。実は
決定的な理由があるんだ。

きっかけや理由は伏せておくけれど、実はミクサちゃんが大好き
なのは（性的含む）肉体的暴行を受けることなんだ。むしろそれを
目当てとしている節もあるね。だから精神的苦痛、放置や無視とか
はちよつと駄目なんだ。つまり彼女は常に構って欲しい、構ってち
ゃんなんだね。しかもなまじプライドや欲求があるから、それらを
蔑ろにされると興奮できなくなるんだ。ホントミクサちゃんは困っ
た娘だよね。

「……さて、そろそろ行くか」

「う、ご主人様。もつと下さい！」

「いいから支度しろ馬鹿」

鞭を束ねて顔面に叩きつけてから、唯は昨日のうちに纏めておい
た荷物を手にとってベッドから立ち上がった。服装は昨日購入した
旅装一式で腰に刀と短剣を差してある。服は長袖のズボンにポロシ
ヤツのようないでたちのインナー、その上に厚手の上着を着込んで
前で閉じている。足元も地球からずっと履いていた皮靴から皮ブー
ツに変えてある。色は目立たないように茶色系統で統一してあった。
「ま、こんなもんか」

昨日まで着ていた物は全て鞆の中に仕舞ってある。流石にスペー
スがないと思っていたが、魔法での拡張に成功した。鞆には今、大
きさによつては畳二畳分の荷物が入るといっても過言ではなかった。
「お前もとつと着替えろ」

「ご主人様、巫女服も持参したいのですが……」

「それは自己責任でどうにかしろ」

それだけ聞ければ十分なのか、ミクサは立ち上がるとあっさり巫

女服を脱ぎ捨てて下着姿になり、唯と同じように旅装を身につけ出した。

ミクサの服装は唯と同じ茶系統の色合いだが、下は丈の長いスカート、上はＴシャツに厚手のカーディガンを羽織っている。昨日も見たとおり少し古びてはいたが、着ている分には不備はなさそうだった。そして背中には細長い袋をぶら下げ、中に入れられた鉄扇ハリセンの柄が肩越しにのぞいている。

「それじゃあ行くか」

「ところでご主人様。私の身体はどうで——あぎやつ!？」

「行くと言っただろうが。早く荷物纏めやがれ」

例え目の前で着替え出しても、一切揺るがない唯君でした。世間ではこれをヘタレと呼ぶかもしれないが、彼の場合は根本的に興奮していません。ちなみにミクサの身体つきはグラマラスという程ではありませんが、出るところは出て引っ込んでるところは引っ込んでます。かしこ。

「よし、纏めたな。飯食ったら町を出るぞ」

「畏まりましたご主人様」

蹴飛ばされてもめげないミクサであった。

今回の調教

鞭打ち数回

蹴り飛ばし1回

第07話（後書き）

今回ちょっと短めなので追加です。悪い子から質問があったら本文中でお答えします。良かったら感想板なりで質問を投稿してみてください。あ、ちなみに良い子からの質問には唾を吐きかけますのであしからず。

作者「お前誰!？」

第08話

「おい、聞いたか？」

「ああ、確認を取りに向かった連中も戻ってきていないらしいし、信憑性が高いな」

朝の食堂は今、一つの話で盛り上がっていた。話題となっているのは新聞（木板だが普通に売られている。日刊）の見出しだった。
『グランロデオ王国崩壊！？』

さて、悪い子の皆の為に新聞を読んであげよう。何々」

『先日よりグランロデオ王国国民に奇病が発症した。その魔の手は王宮にも伸び、王族・奉公人を問わずに貪り尽くした。原因は不明で、宮仕えの魔法医師達にも正体を探ることはできず、そのまま死亡に繋がった。この国は一月前、召喚魔法についての調査を行っていたことが当局の調べにより分かり、近隣諸国もその召喚魔法にて未知の病原菌を召喚したのではないかと強く見ている。また、病原菌は未だにグランロデオ王国を蹂躪しているらしく、入国者の発症が後を絶たない』

うわぁ恐いね。特に『未知の病原菌を召喚した』って記述なんて当たらずも遠からずだからすごいよね。人間って。……え、怖いと思う点が違う、って？ うーん、どうでもいいんじゃないかなあ。皆も、自分から死地に突っ込んでいく良い子達はともかく、悪い子の皆は絶対に王国に近づいちゃ駄目だよ。約束」

「ちよいと、その人」

「うん？」

カウンターで朝食にありついていた男は、後ろからの呼び掛けに応えて振りかえった。そこにいたのは、テーブルに腰掛けた旅人らしき男。だがただの旅人とも思えない。何故なら――

「その新聞読み終わってたなら売ってくれないか？ できれば買った時の半値で」

「これか？ だったらタダでやるから質問に答えてくれ」

「答えられる内容なら」

男は静かに旅人らしき男、唯に新聞を投げ渡し、投げた手をそのまま質問の対象に向けて言った。

「何でこの嬢ちゃん地べたで犬食いしてんだ！？」

「あん……ああ、こいつか」

唯の足元ではミクサが床に置いた皿に口をつけて咀嚼していた。しかもただがつくこともなく、舐めるようにして食事している為に服に汚らしい汚れが付いていなかった。

「いや、今朝『奴隷に人権なんてない』って言ったら急に犬食いしだしたんだよ。昨日までは普通に床から皿を取って食ってたんだがな」

「この嬢ちゃんが奴隷って……グランロデオといい、世の中悪い方向に進んでいるな」

「そんなもんさ、世の中なんて」

背中を向けた男にそう言い残して、唯は受け取った新聞に目を走らせた。内容は奇病による国の崩壊と近隣諸国の今後の方針について語られていたが、解決の目処は立っていないらしい。

（——は、いいんだが……妙だな？）

唯の頭に一つの疑問が浮かんでいた。今後の方針を検討している国の中に、グランロデオの風下に位置する国の名前もあった。だがグランロデオ王国と風下に位置するキャンベル自治区は大して離れていたわけではない。つまり感染が広がっていてもおかしくない国なのだ。

（偶然か、それとも……）

可能性は幾つもあるが、情報が少ない現状では推測の域を出ない。これ以上は考えるだけ無駄かと思いを中断すると、鞆から地図を取り出してテーブルの上に広げた。

「ここから近いのはキール連邦とダルメシアン公国か……おい、奴隷」

「はいご主人様。どうかありませんか？」

食事を終えて床に座り込んでいたミクサは唯の呼び掛けに応え、素早く立ち上がると傍によって手を後ろに組んだ。

「この二つの国のうち、人間の出入りが活発なのはどっちだ？」

「ダルメシアン公国ですが……あまりお勧めしません」

「何故だ？」

ミクサは組んでいた手を解き、右手を地図の上に伸ばして説明を始めた。

「今、この国の情勢は安定していません。何処で知ったのか、グラノロデオと同じように勇者を召喚したらしく、国民を含めててんてこ舞いらしいのです」

「……勇者？」

自分以外の勇者の存在を聞いて、唯はしばし黙考したが、一つ気になることがあったのでミクサの方を向いて問いかけた。

「その勇者は国に協力的だったか？」

「聞いた限りでは、むしろ積極的だったと」

「そうか……」

となると方針は決まった。

唯は立ち上がると、地図を鞆に戻してから持ち手を掴んだ。

「まずはキール連邦に行くぞ。そこから先は着いてから考える」

「ご主人様の意のままに」

荷物を抱えたミクサを従え、唯は宿の食堂を後にした。

今回の調教

犬食い（自主的行動の為、以降はカウントせず）

第09話

町を出て道なりに歩いて行くこと早数刻。もうすぐ正午に差しかかるうという時に、彼らは現れた。

「まあ、これが普通だわな」

「何を訳の分らないことをほざいてやる？」

唯達の前に突如現れたのは筋骨隆々な方々。彼らは徒党を組んで通りがかった者にちよっかいをかけては金品や女子供を誘拐していく、所謂盗賊のお歴々である。さあ、唯とミクサの運命や如何に……って分かりきってるよね？

「さあ、金目の物を置いて行け！」

「後その女もだ。お前の分もせいぜい可愛がつてやるぜ！」

ヒツヒツヒと笑い出す三下共に、唯は一步前に出て言い放った。

「とりあえず諸々は後回しにして聞きたいことがある」

「何だ、冥土の土産に言ってみろ」

よせばいいのに盗賊達はもう勝った気にいるのか、余裕綽々に唯を促した。彼らの過ちはここから始まる。

「よくこういう状況で女子供を誘拐していくが、男の子の使い道って何だ？」

「……は？」

そこからはもう唯の独壇場である。

「男を誘拐しないのは従順でないことから分かる。だが男の子を誘拐しても女の子よりも市場価値は薄い。ならば肉体労働用の奴隷か？ それならば大人の方が反抗的でも即戦力が見込めるから意味がない。例え性奴隷にしても求められるのは一部の顧客のみだから前述の通り価値は薄い。国に兵力として売るのもありだが、それでも買い取ってくれるのは長期利益を図る大国家のみ。国の成長に必要な短期利益を望む中小国家ではまず売れない。ならば仲間にするのか？ けれどもその日暮らしの盗賊稼業ではまともに育てられる環

境ではないので論外だ。相手が王族、もしくはやんごとない身分の御子息ならば成功確率はともかく、身代金という旨みがあるが遭遇するのは極稀！では何故誘拐対象に男の子が入っているのか！？それを答えて欲しい！！」

「ええと……」

突然の質問に狼狽する盗賊達だが、答える者は一人も居ない。それはそうだろう、答えられる程頭がいいなら、こんなところで盗賊なんてやってないだろうし。

「あの、差し出がましいようですがご主人様」
「何だ？」

答えられないと知るや、もう用なしとばかりに目を盗賊達から逸らした唯に、ミクサは見上げた形で答えた。そういえば20cm位身長差があつたなこの二人。

「一応人体実験という用途がありますよ？ 特殊なものでない限り実験対象は子供の方が望ましいですし、いちいち性別を選ぶ必要はありませんから」

「……ああ、それがあつたな」

『いやおかしいだろお前！？』

ポンと手を打つ唯に、盗賊達は声を揃えて突っ込んだ。何しろこの二人、恐がるどころか訳の分からない理屈（盗賊にはそう聞こえた）をいきなり展開してきたのだ。特に男の方はもう興味を失くしたのか、半ば適当にその場から去ろうとしている。

「……って、ちよつと待った！ 何処行こうとしているんだよ！？」

盗賊の一人が無防備に唯達の前に飛び出してきた。

「そうですよご主人様、答えた御褒美に鞭を下さい！」

「いやそれどころじゃないよね今！？ てか鞭！？」

思わずミクサにツツコミを入れてしまう盗賊A。唯はもうどうでもよさげに口を開いて命令を下す。

「『Permission——許可』……こいつら全員しばき倒したら考えて「終わりました！」早っ！？」

唯が驚くのも無理はないだろう。『許可』^{ハリセンもどき}が出ると同時に素早く強化し、命令を言い終わる前にミクサは背中の鉄扇を抜き放ち、盗賊の頭全てに（軽く十人位は居た）強打撃を与えたのだから。いやあ、ミクサちゃんも欲望に忠実とはいえ容赦がないねえ♪

「……まあ、いいか」

「ではご主人様、早速——」

「後でな」

鉄扇を持って目を輝かせているミクサを軽く小突いて、唯は歩を進め——

「……ま、まで」

ようとして断念し、声のした方を向いた。そこには盗賊の中で一際ガタイのいい男がカッタラスを二本、左右の手に一本ずつ握っておぼつかない足取りながらも立ちあがっていた。

「申し訳ございませんご主人様。罰は後ほど受けますので少々お待ちを——」

「いや、いい。じっとしている」

再び鉄扇を構えるミクサを脇に除け、唯は盗賊の前に立ち塞がった。

「お前が頭か？」

「そつだ。お前だけでも——っ!？」

頭が勢いをつけて両手のカッタラスを振り降ろすよりも先に、唯の斬撃が相手の攻撃を狩り取った。

「あ、ああ、あああ………っ!？」

頭の両手は手首から先が切り離され、切断面から次々と血が飛び出してきた。唯は倒れゆく盗賊に目もくれずに、抜き放った蜚丸の刀身を軽く振った。刃に着いた血が飛び散り、地面を赤く染めていく。

「流石国宝、凄いい切れ味だな。……紙」

「どうぞ」

「髪じゃねえよ馬鹿!」

自分の髪の毛を突き出すという、どうでもいいボケを繰り返す奴隷を蹴り飛ばし、唯は適当な布を盗賊の衣類から剥ぎ取り刀身を拭いた。

今回の調教

小突く1回（軽く）

蹴り飛ばす1回

鞭打ち（予定）

第10話

「……さて」

刀を鞘に戻してから、唯は適当な盗賊の男（……よく見たら盗賊Aだった）を選んで蹴り起こすと、ミクサに鉄扇ハリセンもどきを首筋に当てるように命じた。

「お前達の宝を貰おうか？」

「ご主人様に逆らったら……分かってるわよね」

「あんたら悪魔か！？」

その言葉に二人は一瞬見合わせるも、再び視線を戻して言い放った。

『悪魔如きと同列視されても……』

「本気で困った顔してんじやねえ畜生ッ！？」

この男、結構神経が図太い。普通、こんなツツコミを入れたら即殺される筈なのに言い切るとは……恐ろしい子！？

「ま、それはともかく早いとこ吐け。他にも居るから別にお前でなくとも問題ないしな」

「……分かったよ」

諦めたのか何か思惑があるのか、盗賊Aは立ちあがって唯達を案内した。自分達のアジトへ。

さあ悪い子の皆、移動中恒例のお勉強の時間だよ」

今日は唯君の持っている武器、蛍丸について説明するよ。

蛍丸は鎌倉時代末期の刀工、来国俊によって生み出された約1mの刀身を持つ大太刀なんだ。1931年に国宝に指定されたけど、後の太平洋戦争終戦時の混乱で行方不明になってしまい、今は唯君が持っているんだよ。ちなみにこの刀には一つの伝説があつてある武将が実戦で使用した際に刃こぼれしたんだけど、蛍が群がって刀を直した夢を武将が見て、実際に目を覚ますと本当に直っていた

らしいよ。本当かどうかは分からないけど凄いな〜
じゃ、また次回。

「……分かってたよ。分かってたさ！　こうなること位は！！」

「いいから黙れ。ご主人様の耳に障る」

ここまで案内させた盗賊Aを叩きのめし、ミクサは悠々と刀と刀身を拭っている唯に近寄って行った。

「お疲れ様です。ご主人様」

「……ああ」

刀を鞘に戻し、唯はミクサの方を振り向く。その後ろでは死屍累々と盗賊共の死体や虫の息の容態があちこちに転がっており、もはや盗賊の中で立ち上げられる者は存在していなかった。

しかし、幾ら二人がぶっ飛んできると言っても、さっきの6倍近くいた盗賊達を殲滅するなんて……説明を短めにして戦いの様子を見物すれば良かったな。

「で、宝は何処にあるって言ってた？」

「この洞窟の奥らしいです。そこに売り物を纏めたとか」

盗賊共のアジトは自然の洞窟を拡張させた代物で、分かれ道も何もないものだった。だから人一人が通れるくらいの通路に陣取れば、後はやってくる盗賊一人一人を相手取るだけであっさり全滅に追いこんだのだ。しかもなまじう暗い為に飛び道具も使えないし、盗賊達にとっては踏んだり蹴ったりな惨状である。

「……まあ、売り物だな」

「売り物ですね」

二人の目の前には二つの檻があった。片方には強奪した宝石や金銭類が詰め込まれ、もう片方にはどこから捕らえてきた女子供――奴隷が二、三十人、放りこまれていた。

「どうしますご主人様。差し出がましいようですが、隣の宝石類だけでも十分な成果だと思うのですが」

「そうだなあ……」

唯は視線を奴隷達が居る檻に向けた。服は皆ボロボロで髪も乱れている。だが何人かの目が――

「……よし、解放するだけして後は放置。ちよつと檻壊せ」

「畏まりましたご主人様」

そう命じられたミクサは命令通りに檻を鉄扇で壊し（強化済み）、扉をこじ開けた。

「というわけでお前ら、後は好きにしな。どう生きようと自由だが一つだけ――」

檻から次々と奴隷達が出てきた。子供達はともかく、数名の女性
が盗賊の死体から武器を奪い取ると、唯へと押し迫って来た！

「――俺に敵対するのだけはやめておけ。命の無駄だ」

そう唯が言い終わる頃には既に、ミクサの鉄扇で首を引きちぎられた彼女達の死体が地面に転がった。

「……ご主人様。彼女達が襲い掛かってくるのを知ってて解放の命を出したのですか？」

「大方、こいつらも盗人の類だったんだろうな。……まあ、その辺の雑魚ならどうでもいいさ」

「人が悪いね。……檻を開ける前に警告してやれば良かっただろうに」

そう言われ、ミクサは思わず身構えたが、唯は我関せずと自然体で檻の奥に声をかけた。

「……で、お前何者だ？　ここにいた盗賊連中よりもできるようだが」

檻から出て、唯達の前に現われたのは一人の女だった。黒髪をたなびかせてポールと表現してもいい胸をぶら下げている。地球のチヤイナドレスに近い赤い服を身に纏っているが、伸びている手足の筋肉はそこの人間よりも引きしまっていた。もし戦いなれている人間が見たら迷わず彼女をこう推測して口にするだろう。

——拳法家、と

今回の調教

都合によりなし

第11話

「まずは礼を言うておくべきかな。助けてくれたことに対して」

「成り行きだから別にいい」

唯はミクサの後ろから一步も動かなかった、否動けなかった。相手はおそらく強者、今の唯達だとともにやり合えばおそらくは…

…。

「まあ、そう警戒するな。こちらは敵対する理由がないんだからさ」

「……なら、いいがな」

そう呟いて唯は警戒を解き、ミクサにも武器を下ろすように告げた。

「で、お前が捕まっていた理由は何だったんだ？」

「酔っているところを連れてこられたのさ。昨夜」

女は気楽に答えてから隣の檻に立ち寄り、素手で扉をこじ開けた。「本当はついさっき目が覚めて、すぐに脱出しようと思ったんだがお前達が暴れていたのでのんびり見物してたのさ」

「何を——」

「……《鷹眼》のユキジ」

言っているのだ、と続けようとした唯の言を、ミクサが遮った。

「何処の国にも属さない拳法の達人。身の上は誰も知らないけど、噂では彼女の目からは誰も逃れられないとか」

「……へえ、よく知ってるじゃん」

ミクサの予想は的中したが、かえって相手の逆鱗に触れてしまったらしい。女——ユキジはゆっくりと両手を上げて、静かに構えた。思わぬ敵を生み出したことに一瞬目の前の奴隷を殴り飛ばしたい衝動に駆られるも、それどころではないと自分に言い聞かせて、唯は刀の柄に手をかけた。瞬間、

——グウ

「……殺されたくなければ食料を投げ渡せ！」

「もつ取り繕えねえよ——！」

思わず突っ込んだ唯君に非は無いよホント。

「ガツガツガツ……ああ美味かった、ごっそさん」

「盗賊共の食料を全て平らげるとは……」

あれから数十分経ち、唯はミクサにアジトの中にある食料を全て持って来させたが、目の前にいるユキジはその全てを平らげてしまった。というか、数十人分の食料を平らげるって、どんな胃袋をしてるんだこの女。

「いやあ、すまないね。ちょっと通り名を言われただけで感情的になるとか、まだまだ修行が必要だ」

「いや、後先考えずに口を開いたうちの奴隷のせいでもある。あまり気にしないで欲しい」

「それはありがたいんだけど……」

視線を逸らしたユキジの目の先には、ミクサが正座した状態で放置されていた。しかもただ放置されている訳ではなく、その辺りにあった石を膝の上に置いた状態で拘束されているのだ。

「幾ら奴隷でも、ありやちよつとやりすぎじゃあ——」

「あいつの顔見てみる」

それで顔を見たユキジは、すぐに背けた。見てはいけないものを見たかの如く。

「分かつたろ？」

「いるんだねえ、被虐趣味の人間って」
マソヒスト

ちなみにミクサの顔はここでは描写できないので割愛させていただきます。

「……で、あんた私に聞きたいことがあるんじゃないのかい？」

「それはお互い様だろう。……まさかこんな所で出会えるとは思っちゃいなかったがな」

唯とユキジは互に見合わせ、口元を歪めながら同時に言い放った。

『あんた お前、地球から来ただろう？』

やあ、悪い子の皆。今日は新キャラ、ユキジについての説明だ。今回は下に人物紹介を載せておくから、各自それを参照してね。ドン！

穴戸雪路

職業 旅の拳法家（武者修行中にこの世界にやって来た）

人種 黄色人種

性格 大雑把

装備 鉄製のトンファー（×2）、チャイナドレス（赤色）、コンバットブーツ（黒色）、アーミーナイフ

備考 呼び出したのは流れの魔導士だったが、当人はすでに死去以降、彼女はこの世界を旅している。元々武者修行で半ば世捨て人だった為に帰郷意識は皆無。通称《鷹眼》のユキジ

以上。さてさて彼女は敵なのか味方なのか、今後の展開が楽しみだね。ではまた次回に会おう。さらば！

今回の調教

殴る1回（食料調達を命じる前に殴っていた）
石を抱かせて正座（正式な名前は忘れた！）

第12話

この世界で初めて見たのは、ちっぽけな部屋と今にも死にゆく老人だった。彼は私を呼び出すことに全身全霊を注ぎ、死の間際まで頼み込んできた。村を救って欲しいと。

この村は魔獣に襲われていたが、周りの国で救おうと動いてくれる者はいなかったらしい。だから老人は、古い書物から『勇者召喚』の魔法を見つけ出し、呼び出した私に全てを託して息を引き取った。『私の故郷を、頼む』

そう言い残して。

正直恨んでも良かったが、世捨て人同然の私にとっては些事にすぎなかった。何処であろうと変わらない。私はただ、『武人としての道』を極めるだけなのだから。

そして、……魔獣はあっさり死んだ。この世界では地球にいた頃よりも動きやすいとはすぐに気付いたが、それでも簡単に斃せた。簡単に殺せた。

村人からは感謝と畏怖の念を受け取った。だが私はどちらにも興味を持てなかった。私はただ、老人の遺言を聞いただけにすぎない。感謝ならその老人に言っただけいい、畏怖の念を抱きたければ勝手にしろ。そう言い残して、私は名も無き村を去った。

その後は地球にいた頃と変わらない、武者修行の旅を続けてきた。

「……と、言うわけだから、あんまり知っていることは無いわよ？」
「いや、十分だ」

盗賊のアジトを後にした唯とミクサ、そしてユキジは盗賊のアジトを後にして、近くの森の中で焚火を囲っていた。ミクサは周囲の警戒のために近くの木にもたれかかり、唯とユキジは適当な丸太や切り株に腰掛けて向かい合っている。先程まで、ユキジがこの世界に来るまで、そして以降の話を聞いていたのだが、唯は幾つか手に

入れた情報を基に思考を繰り広げた。

「……奴隷、お前は何処で『勇者召喚』の魔法を知った？」

「私も、正確には私の家でもその書物を見つけました。けれども、先程の話のように老人一人の力で呼び出せる程、整然とはしていませんでした。」

「つまり、その老人が見つけた書物の方がより精密だと？」

ミクサの方を向くと、彼女は首肯した。唯は視線を戻し、焚火をじっと見つめている。

「……こりゃちよつと骨だな」

「どういうことだい？」

問いかけてくるユキジに、唯は思考を整理するように説明していた。

「おそらく基は一つだ。誰が考え出したかは知らないが、その魔法を書物に記録として残した。だが第三者が、この場合は編み出した誰かの弟子だと思うが、内容を完全、不完全を問わずに書き写し、各地に散らばってしまったんだ。だから不完全な『勇者召喚』の魔法があちこちに広がったんだ」

「それがどう骨なのさ？」

どうやら今の話は理解したらしいが、それが何を指すのかまでは分からなかったらしい。後ろで立っているミクサも同様の様だ。だから唯は説明を続けた。

「つまりある意味では……各国に最低でも一人、勇者という拉致被害者が居るんだ。しかも性質が悪いことに、中には国に協力的な者も召喚されている。そして勇者はある意味英雄、『力の象徴』だ。力があれば国はどうする？」

「戦争……」

正解だと、唯は静かに頷いた。焚火のはぜる音が耳にこだましている……。

「あんた、頭が回るんなら、その召喚魔法の対策も考えられるんじゃないあ——」

「無理だな。そこいらの書物——写本を見た所で召喚の魔法もその理屈も理解できない。原本を探し出すという手もあるが、今度は素質に関わってくる」

そう、この世界の魔法は素質に半ば左右される。幾ら才能があるうとも、素質がなければ特定の魔法は使えないのだ。確かにイメージも大事だが、それを確たるものにする素質が無ければ話にならない。

「だが手は無いわけじゃない。……要は原本もしくは編み出した張本人だけじゃなく、その素質を持った人間を用意すればいい。そうすれば召喚された人間の帰還も、魔法そのものの封印及び削除も可能となるかもしれない」

「けれども、どちらも手掛かりが……」

そう反論するユキジに、唯は静かに手を伸ばすと、ミクサの方に親指を向けた。

「こいつは俺の奴隷だが、呼び出した張本人でもある。つまり召喚魔法の素質を持っているんだ」

「……ならば原本か編み出した魔導士だけか」

これで当面の目標が決まった。下手な戦争を回避するために、自分達を呼び出した元凶を断ち切るという、何とも勇者染みた目標である。

「……俺は勇者なんて柄じゃないんだがな」

「私も一緒さ。むしろ勇者の仲間その1の方がしっくりくるっての」互いに苦笑するも、すぐに顔を引き締める二人。後はその原本もしくは魔導士だけだが、問題はその手掛かりだ。

「というわけで奴隷、今の話から推測できる魔導士に心当たりはあるか？」

まずは魔導士からあたることにした唯は、この世界の人間であるミクサに問いかけた。

だが彼女の答えは、二人を驚愕させるのに十分すぎる名前だった。

「……一人だけいます。呼び出されたのではなく、自分からこの世界を訪れた『最初の勇者』、《陰陽師》安倍晴明」

今回の調教

見張り（話もしていたので警戒は最低限）

尋問（ただの質問会）

第13話

翌朝。

「……ま、それだと納得だよな」

「何が？」

朝食を済ませ（適当な携帯食料やミクサが獲ってきた川魚）、軽く伸びをしながら呟いた唯の言葉を、目聡く聞きつけたユキジが問いかけてきた。

「俺達の国籍が一致してる理由だよ。世界規模で召喚対象を選んで
いるなら、まず揃うことは有り得ない。けれども召喚魔法の基を築
いたのが日本人なら、世界観が日本に集中している筈だ。つまりゼ
ロとは限らないが、日本人が召喚対象の大多数を占めているんだよ」
「ふん」

どうでもいいことか、とユキジは自らの荷物（宝のある檻の中で
見つけた）を身に着けた。服装は昨日のままだが、腰には鉄製の
トンファ―が二本、むき出しの右の太ももにはアーミーナイフが
鞘ごと括り付けられている。

「私はこれから、最初にいた村にこつそり戻ってみるよ。あの年寄
りが他にも手掛かりを持っていたかもしれないし」

「そうか、俺達はそのままキール連邦に行く。何かあった時の連絡
手段はどうする？」

「……それならいいのがある」

そう言つと、ユキジは足元に置いていた荷物から一本の笛を取り
出して唯に手渡した。

「こいつは一種の犬笛だね。けれども聞き取れるのは全生物の中で
私だけさ。しかも、世界中の何処にいても聞こえる」

「成程。何かあれば笛を吹けばいいと。お前さんの時はどうする？」

「武闘大会なりで新聞に名前を載せる。あんたはその度に笛を吹い
てくれさえすればいい」

後は勝手に探す。そう言い残して、ユキジは背を向けた。そのまま去ろうとするが、その背中に唯が声をかけた。

「ところで、『鷹眼』ってどういう理由でつけられたんだ？」

「……大したことじゃないさ」

背中越しに振り返って、ユキジは口元を歪めた。

「私は『遠目』の魔法が得意だからさ」

後はもう立ち止まらなかった。ユキジの背中が視界から消えるまで、唯はそのまま突っ立っている。

「……成程。盗賊退治の間も、ずっと覗いていやがったのか」

軽く呆れた唯も後ろを向くと、今度は近くの木の下へと歩を進めた。

「それで、反省したか？」

「……ご主人様、頭が破裂しそうです」

目の前にはミクサが、足首を縛られて逆さに吊らされていた。魚を獲りに行くまでの間に唯が仕掛けた罠に引っかったのだ。ちなみに何故こうなったかというと、野宿中にも関わらず、ミクサが唯の寝袋に潜り込もうとしたからだ。無論、服を脱いで下着のみになった状態で。追記しておくとして現在はちゃんと服を着ているのであしからず。あ、スカートは思いつきり捲れているよ、色気も何もないけど。

悪い子の皆、久しぶりっ」

昨日は来れなくてごめんね。実は休暇を取って家で寝ていたんだ。これからも偶に休むかもしれないけど、僕の場合は気にせずこの小説を楽しんでねっ」

さて、今日はこの世界の衣類事情について教えるよ。この世界では中世ヨーロッパの衣装を意識してくれれば、概ね間違いないんだ。でもゴム製品とかの加工技術は発達していないから、殆どの衣服は紐で縛って身に着けるんだ。なので必然的に下着類は当て布に紐をつけたような代物（例：褲、紐パン等）だけど、それを意

識してこの小説を読んでも色っぽいシーンなんて期待できないんだから、そういう無駄な努力（妄想）はむつつりな良い子達にやらせて、僕達悪い子は他所で妄想しようね♪

「あゝたゝまゝが………」

「さて、行くか」

未だにふらつくミクサの手綱を握り、唯は一路キール連邦へと向かっていった。ミクサの髪は多少乱れていたが、特に気にすることなく覚束ない足取りで唯について来ている。

今歩いている馬車道はあまり人が通らないのか、徐々に荒れだしている。この先にある町は2つあり、2つ目の町からさらに3日歩けばキール連邦に着くことができる。

「とりあえず次の町で何日か休んでからキール連邦に向かうか」

「……急がなくていいんですか、ご主人様？」

ミクサの疑問に、唯は何を下らないことを言ってるんだと蔑んだ眼差しを向けた。

「元々阻止しようとしているのは、俺が今後起きるであろう戦争に巻き込まれないためだ。先の危険のために今も危険に晒されたら、それこそ本末転倒だろうが」

馬鹿馬鹿しいと前を向く唯の背中を見つめながら、ミクサは胸中で思い悩んでいた。果たして本当に……これでいいのかと。

そして2人は日が沈み始めた頃になってから足を止め、再び野宿の支度を始めたのであった。

今回の調教

逆さ吊り（片足ではなく両足を縛られた状態で）

第14話

最初に見た時はさすがファンタジーだと感心した。

目の前にいるのは映画で見る恐竜の如き巨体。全身は灰色の鱗で覆われ、鋭い爪を生やした手足が威圧を込めて向けられている。口からは牙が伸び、さらにその上に位置する瞳は明らかに捕食者のそれだ。

——ぐりゅおおおお……！！

馬車道を歩く中、突如現れた巨大生物——竜を見た唯は、

「やかましい」

鞆から取り出した小瓶を竜の口に放り込んだ。それを飲み込んだ竜は気にしたことなく突っ込んでくるも、その直前で斃れてしまう。徐々に痙攣し、瞳を充血させ、爪と指のつけねからは血が流れ出している。

「……ご主人様、これは——」

「護身用だ。触らない限り問題ないし、少し経てば感染力もなくなる」

ただ叫ぶだけで耳障りだったと、唯は思いながら竜に背を向け、先を急いだ。

さて、何でいきなり時間が飛んだのかを悪い子達に説明しよう。

というか彼らも、ちゃんと自分達の行動を皆に教えればいいのにね、恥ずかしがり屋なのかな？

彼らは野宿で一夜を過ごし（また襲い掛かったミクサちゃんは、罰として朝食を取り上げられました。可哀想に）、夜明けと共に旅路についたんだけど、町まで後半日つてところで突如、竜（マウスドラゴン。ここ伏線）が襲い掛かって来たんだ。けど相手が悪かったよドラゴン君。君は生物の本能としては正しいことをしたけど、理性を総動員させて別の獲物にするべきだったね。合掌。

さてさて日暮れ前に町に着いた唯とミクサの二人は、直ぐに宿の部屋を取って街に繰り出したんだ。そのまま匂いに釣られて少し大きな食事処に入ったのはいいんだけど、まさかあんなことになるなんて。さあさあ悪い子の皆注目だよ！　はたして彼らの運命や如何に！！

（必ずしも、“彼ら”が唯とミクサの二人を指すとは限らないんだけどね♪）

「全員聞け！！」

町の食堂に突如現れて声を張り上げたのは、まだ20歳にも満たない少年だった。しかも、見た目はどう見ても日本人である。彼は幅広の剣を背中に差し、お供に赤髪の女性と青髪の男性を引き連れていた。彼らも武装し、各々髪の色と同じ装飾をしたレイピアを携えている。

食堂に居た殆どの人間が注目したのを確認すると、彼は大きな声で名乗りを上げた。

「我が名はミルドラスの勇者、オクティール・シユタイナー！
協力を願いたい！！」

そう言い切った彼に向けられたのは――哄笑だった。

「なっ！？　俺は勇者だぞ！！　笑うなー！！」

後ろに控えていたお供二人も、食堂に居た人間を諷めようとするも、返って煽り上げてしまい、食堂内は笑いに包まれていた。

「……ミルドラスって何処だ？」

「随分、前に（ゴクン！）、臣下や国民が一挙して逃げ出した、北にある廃国寸前の村です」

食堂の2階。いつも以上の量の食事にありついてた唯とミクサは、冷めた眼差しで階下にいる勇者を見下ろしていた。

「村なのに『国』寸前？」

「村なのに『国王』が居たんです。いわば田舎ですね」

「成程、田舎者が」

周囲が笑いだす理由を理解した唯は、そのまま食事を再開した。テーブルの下で犬食いしているミクサも、朝から何も食べていなかったためにすごい勢いで食事にありついていて（2人共竜に遭遇したために昼食抜き）。

しばらくしたらこの哄笑騒ぎも収まるだろうと食事を続けていたのだが、思っていたより『自称』勇者殿は我慢弱かったらしい。

「『Inferno——煉獄』!!」

突如オクタイール（おそらく本名ではない）は叫び、魔法を行使して食堂の床板に叩き付けた。床にはテーブル大の穴が開き、周囲の空気を焦がしていく。

「いいから俺の話聞け!! この中にマウスドラゴンを殺した奴が居たら名乗り出る!!」

勇者の心構え云々はともかく、どうやら狙っていたマウスドラゴンを横取りされたことに腹を立てていたらしい。実際、2階の他の席にいた人間の中に、

「そつえば懸賞金が掛けられていたな……」

とか呟いていた者もいたので、間違いはないのであろう。人々を救うためか、懸賞金のためか（おそらくただの見栄だ）。

「関係ないな」

「あの、ご主人様……」

何だ、とテーブル下のミクサを見下ろした唯。彼女はこうしたものかと悩む素振りを見せながら、こう囁いてきた。

「ご主人様がここに来る前に倒したのが、そのマウスドラゴンですよ」

「あんな弱いのが!？」

思わず声を張り上げてしまった唯。しかも階下にいたとはいえ、自称勇者の田舎者御一行に聞かれてしまったようで、彼らがすごい勢いで2階に駆け上がっているのが視界の端に映っていた。

今回の調教

飯抜き（結果的に唯も一食抜いていた）

第15話

「今の話はどういうことだ!？」

「……まあ、落ち着け」

いきなりテーブルの向かいに腰かけてきた自称勇者を宥めつつ、唯は後ろに控えているミクサの足をすごい力で踏みつけていた（当人は興奮をかみ殺すのに必死だったとか）。

「確かに俺達はそのマウスドラゴンを倒しはしたが、そちらが探しているものとは別の可能性があるんだ。そもそも懸賞金を掛けられるようなドラゴンが、人間2人、実質俺1人で倒せると思えるか？」

「……つまり、偶々遭遇したマウスドラゴンの幼生を倒した、と？」
「襲い掛かって来たから倒したんだ。大体、そんな懸賞金掛けられるような生物にお目にかかれる方がどうかしているだろうが」

そう説くと、向こうも納得したように腕を組んで頷きだした。

「成程、そう考えると辻褄が合うな」

「だろ、そもそも幼生ならともかく、成体のドラゴンがたかだか小瓶1つで眼球が充血して爪の間から血液垂れ流して絶命するかよ」

実際に唯はそう信じて疑わなかったが、目の前にいるオクタイールの顔は徐々に険しくなっていく、最後に怒鳴りつけてきた。

「俺が狙っていたマウスドラゴンの死因と一致してんじゃないかねえか!？」

「……ええ」

唯は思わず落胆してしまった。結構楽しみにしていた上位のドラゴンが、実は地球の技術であっさり死んでしまう代物だったとは思わなかったのだ。

「うわゝ夢が壊れる」

「そんなことはどうでもいいんだよ!!」

いきなり剣に手を伸ばそうとする勇者をお供の二人が必死になって食い止めている間に、唯は八つ当たりと奴隷を大人しくさせるた

めに、ミクサを踏みつけていた足の力を上げた（相手が剣に手を伸ばそうとした瞬間、ミクサも鉄扇に手を伸ばそうとしていた）。

「俺の活躍をぶち壊しやがって、この落とし前はつけさせてもらうからな！」

「（ボソツ）勇者のセリフかねえ……」

呆れる唯を尻目に、オクタイトル（確実に自称だろう。思いつき日本人的な丸顔だ）は感情的なままお供の二人に指示を出していた。ちなみに唯の呟きを聞いていたのは、傍にいたミクサだけだったりする（彼女も同意見）。

「アイ、カイ。今すぐ決闘場の手配だ！ この男を血祭りに上げるぞー！」

『御意』

「いやいやちよつと待て、何故決闘なのかをまず説明しろ」

だが彼らは唯達の話の聞かないまま、その場を後にしてしまった。
「明日正午、この町にある決闘場に来い！ 自分の国の誇りを傷つけたくなければ逃げるんじゃねえぞー！」

さも唯達が決闘に臨むかのような捨て台詞を残して。

さてさて、今日はマウスドラゴンと、決闘場について説明しよう。
まずマウスドラゴンっていうのは、その名の如く地球でいうところの鼠に当たるんだ。ここでは地球という害虫、害獣の類が竜として活動しているから、もしかしたら例のGも竜として存在しているかもね。

次に決闘場だけど、これは早い話公の処刑場なんだ。任意で殺し合いをしたってことを法的に認めさせて、いざ殺人者になっても犯罪者にしないための処置なんだけど、実質は弱者をいたぶるために残された、強者の遊び場なんだ。ほんと勇者召喚といい、この世界は腐っているね」

「……感情論で国の誇りも何もないだろうに」

「それ以前にミルドラスに今更誇り云々に拘るとは思えないんですが……」

あまりの馬鹿馬鹿しさに敵意すら抱けない二人は、どうしたものかと席を立った。

「……ところでご主人様」

「何だ？」

カウンターで精算を終えた唯に、ミクサはどうしたものか、という気持ちで問いかけた。

「彼らの決闘、挑むんですか？」

「そうだな……」

店を後にしつつ、顎に手を当て考え込んだ唯は、ぼそりと呟いた。
「……予定変更だな」

二人はそのままの足で宿に戻り、一晚を過ごしたのであった。そして翌朝、二人は宿を後にする。

次話は最近ストーリーを優先しすぎてできなかった、二人の熱い一夜を一部公開します。会話オンリーですが、どうかお楽しみあれ。ちなみに気分を盛り上げるために、本日午後9時に更新します。

そしてもちろん、悪い子の皆は分かっているよね？ そう、この小説でイヤんな展開は期待できないことを（グロイことは期待できるかもけど）。では、盗聴（ゲフンゲフン！！）もとい彼らの部屋の様子を、会話だけでも拝聴しましょう……。

今回の調教

足踏みつけ（途中から力を込める量を増やした）

第15・5話

注意：よくよく考えたら盗聴もとい耳を傾けている最中なので、擬音等が紛れ込むこともあるけど、悪い子は気にせず聞いてね。例え盗聴で捕まっても、罪は良い子達に全部被せてしまえばいいんだからさ。

——ガチャツ（扉の開閉音）

「……ハア、さっぱりした」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おう、お前も——！？」

——ガタタツ（近くのテーブルにぶつかって、床と擦れた音）

「なんだその恰好は！？」

「これですか、ご主人様が先程湯浴みをなさっている間に偶々訪れた商人から購入したのですが……：：：～

「その金は何処から出した！？」

——ガダツ、ガラガラ……：：：（テーブルが揺れ、上に載っていた木のカップが床を転がる音）

「私のへそくりです！ こんなこともあるつかと隠し持っていた金品と等価交換しました！」

「……つまり、奴隷の分際で金になりそうなものを主人に黙って隠し持っていたと？」

「お言葉ですがご主人様」

——パタ……：：：：：：：：：（ミクサの足音、おそらく唯に近づいている）

「これは正当な労働で得た私の報酬です」

「労働？」

「はい。ご主人様との熱い一夜を過ごすために、私は報酬を頂戴したのです」

「一応聞いておくが……労働内容と報酬を与えたのは誰だ？」

「この前の盗賊退治の折に強奪もとい徴収した金品から幾つか、自主的に拝借しました」

「主人に黙ってネコババしてんじゃねえ!!」

——ガンツ!!（ミクサが蹴飛ばされて、壁に叩きつけられた音）

「……他にネコババしたのは何処にある？」

「既に換金済みで、荷物の奥に袋詰めで隠してあります」

「そうかそうか……没収だ馬鹿野郎!!」

——バツ!!（唯がミクサの手荷物を持つ音）

——バササツ!!（荷物を床にぶちまける音）

——ダッ!!（ミクサが駆け寄る音）

「後生ですご主人様！　せめて私の物に掛ける分だけでも——」

「元々俺が金銭面を管理するつもりだったんだ！　必要な物はちゃんと買い与える!!」

「でしたら宿の裏手にある店の（自主規制）な下着を——」

「『必要な物』だと言っただろうが!!」

——ダンツ!!（ミクサが床に叩きつけられる音）

「……フ、フフフ。とうとう私を呼び起こしたわね唯く——」

「だから下らない理由でS化してんじゃねえ!!」

——バキッ!!（何かが折れた音）

「ぐっ、例え嗜虐的な私（以降はSミクサと命名）を倒しても、第2、第3の私が貴方の前に必ず立ち塞がる——ゲヒッ!？」

——グシャッ!!（何かが潰れた音）

「お前は魔王かつ!？」

「（Sミクサ退場）……どちらかと言うと、ご主人様が魔王で私はその忠実な部下——っ!？」

「だったら主である俺に服従しやがれっ!!」

——バシッ!!（何かを踏み潰した音）

「……ご、ご主人様、もっと私を痛めつけて、ウヒヒ……」

「安心しろ。今度は2倍の量を投与してやる」

「え！？まさか……」

「そう……下剤だ」

「ご主人様！！
それだけは、それだけはー！！」

「フッフッフ、もう遅い。お前は人としての矜持を捨てようと犬食いしてもがいているが、未だに捨てきれていないのはお見通しだ。せいぜい恥をかきやがれっ!!」

「……言葉ですがご主人様。もし私が漏らしたりしたら、恥をかくのは連れであるご主人様も一緒ですよ?」

——ガタガタ！（ミクサが震えて床の物が揺れる音）

「安心しろ。そうなつたら『奴隷』から『犬』に格下げだ。周囲の人間にも『うちの犬が粗相をしてすみませんでした』と言えればいい」「本当の犬になるのは嫌です！！　そうしたら食事が全てドックフードになってしまうじゃないですか！！？」

「変なところ心配してんじゃねえ！！ てか何でこの世界にドックフードがありやがる！？」

「数年前に勇者を召喚しようとした某国が、間違えて召喚したのを複製を得意とする魔道士が数を増やしたんです。その魔道士は全国のドックブリーダーから尊敬の眼差しを集めています」

「……もうツツコみきれん!! おら尻出せ、直接浣腸液注いでやらあ!!」

——ガシッ！！（拘束音）

——ズルッ！！（布をずらす音）

「え、あ、ご、ご主人様、もしかして本気で、いやあ!？　せめて（自主規制）にして下さ——」

「注入！」

「い
—
や
—
っ
—
! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

今回の調教
カウント不可

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3731y/>

勇者と奴隷の珍道中

2011年11月23日21時52分発行